

光原百合「扉守」における潮ノ道・尾道での生き方

荒木, 正見
総合文化学会

<https://doi.org/10.15017/1955350>

出版情報：総合文化学論輯. 2, pp.53-64, 2015-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：



光原百合「扉守」における潮ノ道・尾道での生き方

荒木 正見

小論はファンタジー小説の第一人者、光原百合の短編「扉守」を解説する一端を担うものである。

小論で特に着目したいのは、現実にはあり得ないファンタジーを生み出す作者の無意識に潜み小説を生み出すパラダイム、すなわち暗号解読のための乱数表である。

この小説はたしかに非現実的な内容ではあるが、読後の感動は現実であることはいうまでもない。その感動は、普遍的に誰もが潜在的に持っている一種の心理的傾向性に訴えているからにほかならない。

小説の最後に主人公の雪乃は成長し明るく生きていく。ここに至るまでの心の彷徨こそがこの小説の面白さであるが、理知的な作者は、ストーリーの中で、その彷徨の中に、最後の明るさや成長に至る伏線を織り込んでいる。その構図を辿るのはもちろん正統派の文学研究である。しかし、小論はあえてさらにその底にあるパラダイムに着目する。もしかしたら作者自身も気づいていないかもしれないパラダイムによって我々は感動している可能性があることと、そのパラダイムに成長や人格発達があることに気づくからである。後者に関しては、作者が長年短大―大学の教員を勤めていることと無縁ではない。現在、尾道市立大学教授である作者は、丁寧に学生の文章表現の指導をし、ビブリオバトルに参加する学生の相談に乗る優れた教育者でもある。その活動の背景になる人格発達論に言及することは、正統派の文学論を側面から補強することになる。

さらに、小論ではこの小説が広島県尾道という土地と密接な関係にあることに着目する。作者は大学、大学院でこの地を離れた以外は尾道で生活してきた。そして、この町は、架空の「潮ノ道」という土地であるが、文中の尾道方言や、地理的説明は尾道を彷彿とさせる。そのことは一種の魅力的な雰囲気を出すが、そればかりではない。場所が個を限定するという哲学的場所論の視点からいえば、さりげなく表現されている架空の地域が尾道を土台としていることそのことに目を向け、表現されている架空の地域の本質を尾道の本質と重ねて考えることでより深い理解が得られるはずである。

かくして小論は、この小説から潮ノ道すなわち尾道に託された人生の生き方を学ぶ意義を有するものでもある。

原作のテキストは、光原百合『扉守 潮ノ道の旅人』（文藝春秋、文春文庫、2012年）を用いる。

1. 「扉守」のストーリー展開

考察の手がかりとして、ストーリーを辿りつつ小論の課題となる事柄を顧みる。

はじめに描かれるのは路地とそこに住む青年と、その路地を囲む風景である。

「路地の南の端を出たところは海岸通りで、そこには船着場がある。ちょうど対岸の唄島からフェリーが着いて、通学の高校生たちを自転車と一緒に吐き出しているところだ。」(87頁)

と記される路地のモデルは作者に伺ったところでは(2014.9.6、11.30ほか)浮御堂小路とすることである。

山の尾の道というところから尾道という地名が生まれたと言われるくらい海岸と山とに挟まれた狭い海岸の町を東西に抜けるメインストリートは古来、現在の本通り商店街の通りであった。浮御堂小路という石の道標はその本通りから海岸に南下する、人がすれ違うのもやっとなという細い路地を示しているようで、この小説の舞台もこの路地である。この浮御堂小路は、浮御堂という平安時代に起源する施設名の参道に由来し、浮御堂は現在小さな稲荷神社がある角から南西の一角にあった。文政四年(1821)尾道町絵図ではこの場所に浮御堂が記され、南北の通りが浮御堂小路と記されている。

文化十三年(1816)に龜山士綱によって記された『尾道志稿』(得能正通編『備後叢書第十卷 尾道志稿』備後郷土史會、昭和九年)では、「山城國醍醐三寶院の末寺也。平城天皇大同二年(注：807)丁亥正月の開基と云。」(『尾道志稿』61頁)興味深いのはその由来である。

「紀州熊野本宮の沙門元達僧都、宿願ありて諸国遍歴し當浦に至る。時に西海を眺望せしに二筋の瑞光天に達しければ、元達不思議の思ひをなし、則浦人を召、小舟に乗り、彼瑞光の源を探るに、忽ち海潮左右にひらけ、其中間二丈ばかりにして二ツの大石顯れ出たり。」

(『尾道志稿』61頁)と、この地に作られたのがこの浮御堂だというのである。科学的真偽のほどはもちろん不明ではあるが、浮御堂小路という名称を口にするたびに、尾道の方々がこのような神秘的なエピソードを空想し、ファンタジックな感情に浸ることは容易に想像できる。歴史上重要な拠点であった尾道にはこのような地名が多い。それが、ファンタジー小説の作者、光原百合の感性に影響を与えていることは否めないであろう。

さて、文政四年尾道町絵図では、浮御堂の南は直接海になっているが、現在その海岸に沿って通りと商店が並んでいる。林立していた渡船も最近は減少し、この小説に見合う光景が見られるのは、ここから少し西、大林宜彦監督の映画「さびしんぼう」(1985)で印象的に描かれた福本渡船であろうか。対岸は向島だが、その一部を古く「小歌島(おかしま)」と呼ばれた経緯もあり、作者が「唄島」と名付けたのにも納得できる。もちろん、架空の潮ノ道では、この船着場はこの路地のすぐ南あたりに位置させていると、作者にも確認した(2015.4.4)。

現実の尾道を彷彿とさせる潮ノ道に関する記述はさらに続く。

「潮ノ道と呼ばれるこの街と唄島との間を隔てる瀬戸の海は、川としか思えないほど狭い。」(87頁)は、もちろん尾道水道である。この狭さは次の記述にイメージが繋がる。

「まだ緑濃い島の山頂付近の一角には、朱塗りの寺が建っている。」(87頁)と述べられるこの「朱」は、五行説の方角と色との関係を意識している、と作者自身に伺った(2014年11月30日)。たしかにこの作品集『扉守』の「天の音、地の声」では、「この町は、東から瑠璃山、黒曜山、白珠山と呼ばれる三つの山が海まですぐ迫っているため、瀬戸内の海に沿って細長く伸びている。中で黒曜山はやや内陸に引っ込んでいるので、町は三つの山の懷に抱かれて、おおむね弓形をしているとっていい。」(44頁)とされている。

瑠璃色はおおむね青色なので、五行説の東が青、西が白、北が黒、そして、この「扉守」の唄島山頂付近の朱塗りの寺の赤で、四方の色が揃うことになる。五行説の真ん中は黄であるが、これは潮ノ道の街を指すことになろう。この五行説から派生したとされる四方の色だけとなれば相撲の土俵、四方の房の色などにも示される四神となる。潮ノ道はいわば「四神相応の地」として描かれている。作者からの聞き取りではこの「四神相応の地」という言葉を用いられていた(2015.4.4)。

さて、このような五行説に拠って四つの色で囲まれたこの町を描こうとするとき、表現上の効果としてはここに何らかの凝縮された焦点のような場が示唆されることになる。それこそが、ここに現れる「扉」である。

主人公の高校生雪乃は、その「扉」のある今風の雑貨屋兼カフェ「セルベル」のある小路を抜けて自転車で登校しつつ、その朝初めて「セルベル」の存在に気づく。それは、雪乃の意志ではない何かに導かれたようだった。あとで、導いたものが二つ存在することが示される。そのひとつはセルベルの店主、「ほうきで地面を掃く背の高い青年の姿」(90頁)で、もうひとつは頭の中で「ミ、ツ、ケ、タ」と囁いた(91頁)「なにものか」、である。

この「なにものか」のせい、雪乃は、それまで比奈子たち悪友に利用されるがままだった自分から変身する。下校時の誘いに対してきっぱりと断り、「淡々と静かな口調を崩さず言う自分に、雪乃は驚いていた。人の誘いをこれほどきっぱり断ったことは、今までにない。」(91頁)と述べられるそのことは、いわば自主的な心、自立心の芽生え、ととることが出来る。

雪乃は帰りに初めて「セルベル」に足を踏み入れる。店には雑貨が溢れ、庭にはお地蔵さんがいる。そこには、主人の背が高い青年と、この短編集では常連の老僧、了齋と、そして椅子を揺らして去っていった何かが居る。了齋は常に狂言回しの役で登場するが、ここでも「あんた、最近どこか、変わったところに行かんかったか。人が急に死んだような場所とか——」(96頁)と謎めいたことを言う。そして小説上の了齋の役割上、それは真実である。

帰り際に青年は雪乃に、「陶製らしい、小さな白い犬」(97頁)、「二センチほどのごく小さなもので、まだ子犬らしい、ころころと太った姿をかたどってあった」(99頁)という人形を贈る。

雪乃は帰りのフェリーで、それで、小学校一、二年のころ、友達と一頭ずつ拾って帰っ

て病気で死なせてしまった子犬のことを思い出す。しかし、その思い出に付随して覚えた生き方「言い張ってもがんばっても無駄、そんなあきらめ」(100頁)に対して、今日は「一だけこれからは違う、今までのような暮らしはごめんだわ。」(100頁)という意志が目覚めたことを自覚する。その強さは雪乃自身が自分で驚くばかり(100頁)。その瞬間、潮風にあおられて手の平から子犬が飛び出す、子犬は空中で向きを変えて、まるで本物の犬のように雪乃に飛びついてくる(101頁)。

さて、先の了斎の言葉は事実だった。先週の日曜日、近くのより都会の街(モデルは福山?)に悪友に誘われてロードショーを見に行った帰りのその駅前、最近の殺人事件の現場で、雪乃はこの世のものではない女を見てしまう。「色白の、今まで見たことがないほど美しい顔」「その首が、にゆるり、と伸びた。目が合うと彼女は、口を長く横に開いて笑った。顔がぱっくりと上下に割れて見えた。裂けた口から声が漏れた。——ミ、ツ、ケ、タ。」(103頁)

雪乃はそこで気を失い、遅くなって自宅に帰りつくが、そこで母に対して初めて言いたいことを言う。「言いたいことを言うのは、こんなに簡単なことなんだ。心にまかせて素直に口にすればいいんだ。身体の中に力が満ちてくるような気分だった。」(105頁)と記されることは、幼いころ父親を病気で亡くし、それがきっかけでこの町に戻ってきて、弁当屋を展開する多忙な母親に感じていた依存と不満からの自立を意味する。

ここで作者は雪乃が繰り返し見る夢を挿入する。このような挿入は、文章作成上、象徴的な意味を持つので特に着目する。

雪乃は「不定形の塊のようなもの」「それ」と一緒にいる。その肩のようなところに宿り木のようにくっついている。「それ」は、雪乃をくっつけたまま、なにやら強い光のような塊にしっかりと掴まえられ、ものすごい勢いで引かれていく。(105-106頁)

「引かれながら渡っていくのは、凜とした灰色の空間」で、「名を持つものが何一つない、光も、闇さえもない空間」「空間のところどころに裂け目」「どの裂け目の向こうにも、豊かな色と光があふれている」「それ」はそのどこにも行くことはできない(106頁)と述べられるこの空間は、「豊かな色と光があふれている」われわれの日常からみれば、識閥下の抑圧された世界である。「それ」はかつて属していた世界、すなわち現実の意識的世界で、やりたいことをやり続けた。「その世界での寿命が尽きたとき、あらゆるもののつりあいを保つ「法」が発動し、「それ」は捕らえられて、罪を浄化するための世界に送りこまれた。」(106頁)

そして、「それ」がもがいていると、空間にゆがみが出来て捕縛がゆるみ、見えた裂け目から明るい世界へと飛び出してきた。(106-107頁)

と一連の夢の構造はいわば意識対無意識の構造を成す。このことは後に詳述する。

さて、翌日の高校では友人関係が変化している。比奈子たちが仲間外れにしてくるのである。しかし雪乃は動じず、自分なりの生き方を探る。そして、自転車で帰ろうとした時、

大人しい山代真名が声をかけてくる。(107-109 頁)

その日はそのまま別れて雪乃はセルベルに行くが、人格が全く異なって、店主の青年とお互いにこの世のものでは無いような話をする。雪乃にとりついているものと青年とは長い付き合いのようである。とりついているものは「宿替え」して、いまは雪乃にとりついていることが示される。その前は、近くの町のあの駅前女性だったことになる。とりついているものは雪乃の変化を自分のおかげだと自負している。すなわち「あたしと一緒にってから、この子は強くなれたのよ。」と。(111-112 頁)

ここで青年は作者に代わって、潮ノ道の特殊な力について述べる。「この町にはあんたのいうとおり、大地を流れる力が特に強く働いている。いろいろなモノがそれに引きつけられて集まってくる。それだけに、つりあいを保つ力も強い。あんたが万物のつりあいを乱す存在だと認められたら、排除する方向にそれが働く」(113 頁) このことがストーリー展開に重要な鍵となるとともに、それが冒頭の風景を丹念に述べたことと繋がることを確認しておく。

さて、この時を境に、雪乃は自分と自分に住み着いているなにものかと対話できるようになる。このなにものかは、征服欲が強い。人も世界も自分のものにしてしまおうと考えている。それを実行するためには雪乃を完全に支配しなければならない。いまにも雪乃がそれに合意しそうになった時、あの子犬の人形が邪魔をする。それも、セルベルの秘密を教えてくれと問い詰める仕方。なにものかは、焦って子犬の人形を壊せと迫る。雪乃は迷いつつも拒否し、混乱の中で気を失う。(119-125 頁) この対決は雪乃の成長にとって重要な意味を持つ。それは次章で詳述する。

気が付いた雪乃はセルベルの裏庭の地蔵の前にいた。「なにものか」は雪乃から抜け出して、あの口が裂けた面のような顔で、青年と対決する。店中の商品が散乱する中で青年は自分の昔話をする。青年も、本来死んだばかりの赤ん坊に、なにものか別の世界の魂が住み着いた存在だという(129 頁)。しかし雪乃に住み着いたものとは性格が異なり、潮ノ道という、この特別の場所のさらに中心の、あちらとこちらの間に開く扉の番人、つまり「扉守」をしているという。「限度を超えて良からぬものが入ってこないよう、この世界と異界とを結ぶ扉をしっかりと閉ざして守る。」「そうして今この」町にいるモノが、つりあいを崩すような悪さを始めたら——扉を開ける」「この世界の力では、あんたを滅することはできない。だが、扉の向こうに送り込むことはできる。それが扉守の仕事だ」(130 頁) 扉守とはこのように、両方の世界を結び、秩序を保つ存在である。

それまで何人もの宿主に住み着いては寿命が尽きるまで好き勝手をしてはまた次の宿主を探して乗り移って回るなにものかが扉の向こうに去った翌朝、雪乃はセルベルを訪れる。かたづけをしようかという雪乃に青年は、学校帰りで良いからというのに、雪乃は自分の責任だからと強く主張する。強くなったと、青年は半ば喜ぶ。その時、「この子のおかげだわ」と言う雪乃の子犬の人形から「小指の先ほどの、毛むくじゃらの鞆のようなもの」が

飛び出して他の人形に消えた。これが雪乃の危機を防いだのだと暗示されるが、あえて「でも、忘れんとき。受け入れないことを選んだのは雪乃ちゃん、あんた自身じゃ」これが、作者が雪乃に送るエールだということはいうまでもない。(132-133 頁)

そして成長した雪乃を象徴的に示すのが、幼馴染真名との友情の復活である。実は、子供のころ二頭の犬をそれぞれに拾って帰ったのは、真名だったのだ。そして、雪乃がすぐ死なせてしまったのに対して、真名のはゴンと名前を貰ってまだ生きているのだ。「明日から、一緒にお弁当食べよ」と思い切って言う真名を受け入れて、雪乃は見事に再生する。

2. ストーリーと人格発達

さて1. でも少しずつ言及してきたが、この小説には、人格発達の鍵が至る所にちりばめられている。ストーリーの最後には、成長して「勢いよくペダルを踏んだ。この町を抱く三つの山が、今日は穏やかにほほ笑むように、午後の日ざしに照らされていた。」(137-138 頁)と希望を持って終わるのだから、この小説の中で雪乃はたしかに成長し人格発達を遂げたのである。ここでは、その意味を確認する。

雪乃の成長や人格発達において問題だったのは、人間関係の未熟さであった。

その原因は、先に述べたことから多忙な母親との、依存したくともできない不満と、仕事に追われているゆえに子供に対して必要以上に支配的になっている母親の態度とに起因した関係にあった。亡くなった子犬はその象徴として設定されている。

すなわち、雪乃にとって象徴的に乗り越えなければならない課題は、この子犬の死にまつわる外傷体験である。

結果を先に述べれば、それは共に子犬を拾い、今もその犬を育てている真名との久しぶりの友情復活によって乗り越えたことが示される。

真名については量的にはさほど触れられていないようだが、この犬のエピソードすなわち雪乃は失った子犬を真名は大人にまで（老犬にまで？）育てているという対比や、控えめで優しい好感が持てる人柄として作者の愛情が感じられる表現が為されている。少なくとも読者は、最後に真名が「一緒にお弁当食べよ」（137 頁）と言ったことで雪乃は救われ、「そのうち、まなちゃんを「セルベル」に連れていこう」（138 頁）と雪乃が言ったことで、今度は安心できる人柄の真名と二人そろって大人への階段をのぼり始めるのだ、と豊かな気持ちになる。

さて、このような穏やかな心境へと至るためには、雪乃は心の大冒険をしなければならなかった。その仕掛けとして、「それ」や「扉の向こう」が現れる。

「それ」は本来「扉の向こう」の存在で本当の姿かたちは不明だが、「扉のこちら」もしくは「扉のこちらにいた」ものに宿って「扉のこちら」に現れる。「それ」によって性格は

異なるようで、雪乃にとりついた「それ」は邪悪な世界制覇さえ狙う野心を抱いているが、「セルベル」の青年の「それ」は秩序を守ろうという意識に溢れている。その意識は作者への聞き取りによれば、人間への共感のようなもので、良い悪いではなく、世界のバランスを崩さず、迷惑をかけないものであれば自由に存在できるという意識だということである（2015.4.4）。

では、「扉の向こう」とは何だろうか。その世界の性質について作者に伺ったところ（2015.3.24）、無限の何もかもが含まれる世界、という答えが返ってきた。ちなみに筆者の周囲にイメージしてもらくと、興味深いことにそのひとそれぞれを投影した答えが返ってくる。建築設計技師さんなどは、コンピューターシステムの世界のようだ、とさえ。共通していることは、われわれが生身の現実と思っているこの世界ではないという点である。

作品中の夢のエピソードに示されるように、心理学的にはそれは識閾下すなわち無意識の世界である。意識とは自覚している領域である。これは自分自身で認識できている現実の世界である。他方無意識は、無自覚の領域である。従って論理的には自分自身では自分の無意識は認識できない。

ところが一方で、自覚していない何かによって自分が動かされていることを感じることもある。河合隼雄『無意識の構造』（中央公論社、中公新書 481、1977年／1999年）では、フロイトの業績をなぞりつつ、ヒステリー症状がその人の無意識に潜む心的外傷の結果だと説明することで、無意識の存在を確認している（解りやすい図は『無意識の構造』7頁＝小論末の註に筆者なりに説明しやすいように作図したものを提示する）。

このような無意識的存在は、理論上は無限の多様な姿を持ちうる。同書ではユングの理論を解りやすい図で説明しているが（『無意識の構造』33頁）、それによると無意識の最底部に横たわるものは普遍的意識（ユングでは collective unconsciousness＝集合的無意識と呼ぶのが普通である。）とされ、「普遍的無意識は、個人的に獲得されたものではなく、生来的なもので、人類一般に共通のものにいたるまでに、ある家族に特徴的な家族的無意識とか、ある文化圏に共通に存在する文化的無意識などを考えることもできる。」（『無意識の構造』33頁）と述べられている。その領域における無意識的なシステムは意識に現れるときには意識的な何ものかの姿をとる。それは「元型(Archetypus, archetype)」と呼ばれる（『無意識の構造』84頁）。元型はあくまで無自覚的な無意識に存在するものなので「先験的に与えられている表象可能性」（『無意識の構造』87頁）であり、「表象ではない」（『無意識の構造』84頁）。

また、その上位の層で意識の地平のすぐ下に横たわる層が「一度は意識されながら強度が弱くなって忘れられたか、あるいは自我がその統合性を守るために抑圧したもの、あるいは、意識に達するほどの強さをもっていないが、何らかの方法で心に残された感覚的な痕跡の内容から成り立っている」（『無意識の構造』33頁）とされる個人的無意識である。もちろん、個人的無意識も、意識に現れるときには表象の姿をとるがあくまで表象可能性

であり表象そのものではない。個人的無意識の場合にはこのような表象は個人の生育史に由来するコンプレックス（心的複合体）として示される。

さて、「扉の向こう」をこのような無意識の世界と考えると、すべてが繋がってくる。そこはあやふやな何もかもが存在する場所である。意識にのぼる時には、その意識の主人の状態に応じた姿をとる。作中の「それ」のように、本来も様々な性質を持つものだし、「それ」が宿る対象の状態によって意識的な姿はまちまちである。

雪乃の母親との葛藤と子犬の死は個人的無意識におけるコンプレックスを形成した原因である。何事も自立的にできず悪友に流され、母親にも素直に言えないという、意識的な行動に現れる。

そこに現れるのがもっと強い魔物のような「それ」である。「それ」はいかにも不気味で、邪悪で、世界制覇さえ企むような存在ではあるが、結果的には雪乃に成長をもたらした。すさまじいエネルギーで個人的なコンプレックスを吹き飛ばしてしまったのである。

これは様々な要因の結合体であるが、解りやすい概念として「影」が挙げられる。「影」とは「生きられなかった反面」（『無意識の構造』92頁）と述べられる。人は本来、意識も無意識もともに無限に持っている存在である。しかし、個人的にはその無限なすべてを生きることが出来ない。例えば生まれ落ちた時の身体的特徴を以て、男か女かのどちらかを選んでそのように生きなければならない。しかし、本来は無限なすべてを持っているのだから意識的は生きられないものが蓄積していくことになる。これが「影」である。

「影」が生存に不利な姿に大きくなると、人は本来持っている生存本能でその影と対決し、意識的な生き方と統合する。これが成長、人格発達である。

雪乃にとりついた「それ」もこのような「影」だと考えることが出来る。邪悪で強大なエネルギーを持っているのは、実は雪乃にそれが必要だったからである。それは普遍的無意識から沸き起こってくるエネルギーでもあるが、無限の世界から沸き起こってくるだけに、氾濫すると意識的世界を滅亡させかねない。それをコントロールするのが、無限の世界に横たわる真の生存原理である。日ごろはそれによって、エネルギーの暴走を防いでいる。ところが作中の夢のエピソードにも示されるように、何らかの理由で、特に意識的に生きているものや意識的世界の背後にある無意識の生存能力がコンプレックスなどで緩んだときには、エネルギーは暴走し、個人にとりついてしまう。「ミ、ツ、ケ、タ」というのは、そのようなコンプレックスによって弱まっているものを見つけたという意味である。

ところが雪乃は「それ」を追い出すことに成功し、ひとつ成長の石段を登る。それは、「セルベル」の青年や犬や子犬にとりついてきたあるものなどの手助けにもよるが、その全体を統合する雪乃自身の強さに拠るものでもある。先に「でも、忘れんとき。受け入れないことを選んだのは雪乃ちゃん、あんた自身じゃ」（133頁）と青年が述べたことは、心のうちの分裂と対決を統合した雪乃の強さを意味している。因みにこの統合に失敗すれば例えばいわゆる「統合失調症」という病気になる。

かくして物語の背後に横たわるパラダイムの一端を説明したといえる。

3. 潮ノ道・尾道での生き方

最後に言及しておかねばならない象徴的な事柄がある。それは、潮ノ道という場所と、犬である。

先に述べたように、「扉」や潮ノ道は、五行説の4色を現す山々に囲まれたその焦点にある。「——この土地には妙な力がある。」(99頁)と述べられるその土地は、「時代の流れから外れたような静かな街だが、北前船が瀬戸内海を盛んに行き来していた時代には重要な寄港地として繁栄していたという。だが、信仰の拠点としてはそれ以前から大きな意味を持っていたと、歴史好きな国語教師が語るのを聞いたことがあった。」(98頁)と述べられるこの場所の、一種の気が宿る場所としての表現は、不思議なことが起こる場所ということとともに、文化、経済両面における発展の背景を成す場所であることをも含む。後者が、住民の、特に青少年の人格発達を促す重要な要因であることはいうまでもない。

このような観点から潮ノ道のモデルとしての尾道と、潮ノ道の表現を比べてみると、作者は現実の尾道以上に、この神秘的に包まれた感じを強調していることに気づく。

例えば「黒曜山楽土寺」は、現実には「真言宗醍醐派・大本山・摩尼山総持院・西國寺」を指すと思われるが、西國寺は、その拠る山「摩尼山」もしくは「西國寺山」の麓近くにある。「真言宗・大宝山・権現院・千光寺」が拠る千光寺は、たしかに「大宝山」もしくは「千光寺山」の山頂近くにあるが、「この店の前からは二つの山頂に立つ朱塗りの寺と黒瓦の寺が、それぞれ狭い路地に切り取られ、額にはまった絵のように正面から対峙している」(88頁)と述べられる時、楽土寺は標高を高く設定してある。尾道三山のもうひとつは、

「真言宗泉涌寺派・大本山・転法輪山・大乘院・浄土寺」の拠る「転法輪山」すなわち「浄土寺山」(『尾道志稿』11頁では、「瑠璃峯」とも述べられているように、瑠璃山とも呼ばれる。)だが、先に小説では瑠璃山(浄土寺山)、黒曜山(西國寺山)、白珠山(千光寺山)と述べられて、街を囲むようだとされた通り、現実にも三山はそのような地形になっている。それに加えて、信仰対象を高く設定すると、包まれた感じがさらに強くなり、場所のエネルギーがその中心に集中しやすくなる。かくして、この町とその中心としての「扉」へのエネルギーの集中を示唆する。このエネルギーこそがこれまで述べてきた、一人の少女に激しく劇的な成長、人格発達をもたらすのである。

ここで「扉」について確認しておく。「扉」はこのようなエネルギーの中心的存在である。その「扉守」の青年は、世界の秩序を守る使命を負ったものだが、かといって強力なイデオロギーや武力のような力で押さえるのではなく、「万物のつりあいを乱す存在だと認められたら、排除する方向にそれが働く」(113頁)と述べられるような潮ノ道の特別な力を控

えめに支え、いわば誰もが他人の邪魔にならないように生きていくのを助ける存在である。それは、現代の我々にとって、青年という誰かの問題ではなく、我々自身の生き方の問題であることはいうまでもない。

また、青年はこのような使命を自覚しつつ各地を巡ったようだが、いわば居心地の良い場所としてこの地を選んだとされる。おそらくは各地にこのような「扉」はあるのだろうが、少なくともこの潮ノ道にはそれが存在する地形的必然性があるように表現されてきた。

次に重要な要因は「犬」である。亡くした子犬によって雪乃の人格発達が妨げられていたし、それゆえに、結末では、その子犬とともに捨てられていた子犬の生存によって救われる。これは人格発達論的には典型的な「死と再生」すなわち、それまでの自分のある面が無くなり代わって新しい面が生じることによって自分自身の成長、人格発達を得る、ということの意味する。それを一貫して支え、正しい人格発達へと導くのが小さな犬の人形である。

「犬」の象徴的意味を手近なシンボル辞典で確認すると「本能的な警告、一般的な欲望や衝動反応(Instinktmahnung, normale Wunsch- oder Triebreaktion)」という意味が散見される(Hanns Kurth “*Lexikon der Traumsymbole*” Ariston Verlag, 1977/1984)。犬が守ってくれる存在であるとともに、本能的欲望が発露しやすい衝動的な存在でもあることが覗えるが、この小説の底を流れるテーマがそのような多重性の克服であることはいうまでもない。

そして、この作品で犬が重要な意味を持つものとして象徴的なのは「セルベル」という店の名である。「セルベル」という名称は、スウェーデンの作曲家だったり食品の名前だったりするが、作者に伺ったところ(2014.9.6、11.30 ほか)、ギリシア神話のケルベロス(Kerberos)だということである。ケルベロスは、周知のように時代や場所によって様々な意味を持ってきたが、本来は、三つの頭を持つ冥界の番犬として表現されてきた。冥界から逃げ出そうとする死者を掴まえて食べてしまう存在という知られた意味はそのままこの店の場にふさわしい。

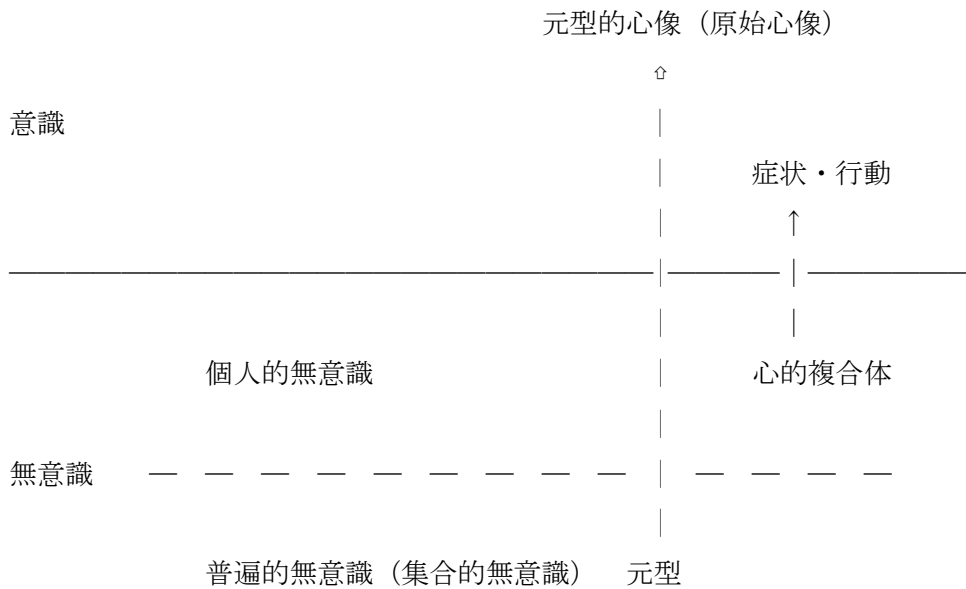
これらの犬の意味は、現実の犬に起因した意味ではあるが、作者の心像である以上、作品の主人公に必然的に関与すべき存在でもある。作中の種々の犬がそれぞれの働きをしつつ、主人公の危機を救い、成長を成し遂げる。作者の深層に、犬はもうひとりの主人公でもあるかもしれない。

さて、かくして、多重に組み込まれたパラダイムの一端を辿る時、この作品の重みが垣間見えてきたような気がする。それは、我々が成長発達しつつ生きていく方法の手がかりでもある。場所の力を正しく受け止め、自分の問題と果敢に戦って乗り越え、本来の平穏なホメオスタシスを得る、そのそれぞれの仕方のヒントはこの作品を読むしかない。さらに読み込み、この作品に迫るとともに、他の作品と読み比べ、また、作者がヒントを得たとされる他の著者の作品をも比較することで(宮部みゆき「魔術はささやく」、乙一「天帝

妖狐」などがその一例だと 2015.4.4 に筆者に明かしていただいた。)、作者の真意がより鮮明に見えてくることは明らかである。

最後に、筆者の厄介な質問に快く応じて頂いた作者光原百合先生と、フィールドワークの際、常に穏やかに接して下さった尾道市民の皆様に心より感謝申し上げ、ますますのご発展をお祈り申し上げたい。

図： 意識と無意識（河合隼雄『無意識の構造』87頁の図を改編）



引用文献：

光原百合『扉守 潮ノ道の旅人』文藝春秋、文春文庫、2012年

『尾道志稿』（得能正通編『備後叢書第十巻 尾道志稿』、備後郷土史會、昭和九年）

河合隼雄『無意識の構造』中央公論社、中公新書481、1977年／1999年

Hanns Kurth “*Lexikon der Traumsymbole*” Ariston Verlag, 1977/1984)

[The Way of life in Shionomichi=Onomichi on the novel “Tobiramori(Gatekeeper)” by Mitsuhara, Yuri]

[Araki, Masami・総合文化学会・哲学・心理学・比較思想]